萩藩における寺社建築物に対する建築規制と作事申請手続き上の違反について

—萩藩の建築規制に関する研究 その1—

THE ARCHITECTURAL CONTROL FOR BUILDING OF TEMPLE AND SHRINES,
AND BUILDING PROCEDURES AGAINST THE RULE AT THE HAGI CLAN

—A study on the architectural control at the Hagi clan No. 1—

妻木 宣嗣*

Noritsugu TSUMAKI

I studied The architectural control of building of temple and shrines at The Hagi Clan, and pointed out following facts.

1. At The Hagi Clan, The architectural control of building and shrines was established at the Kyouhou period.
2. With regard to the scale of building, "three beam" The structural control could not be looked, but was controlled by the area of building.

Keywords : Architectural control, The Hagi Clan, building of temple and shrines, "Shoshioshiokicho" (Judicial precedents of The Hagi Clan)

建築規制、萩藩、寺社建築物、「諸仕御仕置帳」

はじめに

筆者は以前、支配関係の複雑な地域である畿内（以下非領国地域と呼ぶ）のうち、特に大坂町奉行所の広域支配地域における建築規制（以下単に規制とする）について考察したが¹⁾、この非領国地域における規制研究は、近年大きな進展がみられる²⁾。また江戸においても、寛文10年令の発見や、幕府の規制許可認可システムの解明など、近年規制研究は深化されつつある³⁾。

ただ近年の規制研究がいずれも非領国地域、あるいは幕府行政がより直接影響を与える江戸市中をフィールドとしたものであるのに対し、近世期、より一般的な支配形態である藩に代表される、いわゆる領国地域における規制研究は、いくつかの先行研究を挙げることができるものの⁴⁾、史料の制約も手伝い、これを詳細に論考したものは少ないと言わざるを得ない。

しかし領国単位の規制を丹念にみていくことは、規制研究史の現状を考えたとき重要であることはいうまでもない。こうした研究蓄積により、はじめて各地域独自の歴史的な前提を乗り越えた、国奉行主導の非領国地域、あるいは幕府直轄地域と領国地域との規制の比較が可能となるのはもちろんのこと、規制を基軸とした場合の幕藩体制という国家構造の重層的な側面、あるいは幕府に対する領国側の主体的な側面、これを前提とした近世建築物の諸相を明らかにし

得ると考える。

かかる問題意識をもちつつ、本稿では対象地域を萩藩に設定し、先の問題意識解明の前提作業として以下の課題を設定する。まず①萩藩における規制のうち、寺社建築物、および諸臣屋敷（武家屋敷）に対する法令の検討、および②具体的な規制違反事例の検討、以上の2つを設定する。ただし本稿では寺社建築物のみを対象とし、諸臣屋敷については別稿で考察する。また規制違反事例の検討については、作事申請手続き上の違反、および違反建築（建設）行為を行った規制違反の2つに分類できるが、本稿では紙数の関係上申請手続き上の違反事例のみを取り上げ、違反建築（建設）行為の事例については別稿で考察する。

史料としては、筆者によって近年確認した山口県文書館所蔵「毛利家文庫」の規制関係史料を用いた⁵⁾。この史料のうち、特に「諸仕御仕置帳」（631冊）には、寺社および武家屋敷の建築規制違反約180例が記載されている⁶⁾。「諸仕御仕置帳」は年代順に、主に藩士や寺社の勤務上の過失や、職域からの欠落などといったさまざまな事件の経過と、その処分について記載された、いわば判例集である。

1. 萩藩寺社建築に対する建築規制

本論文は1999, 2000年度日本建築学会大会学術講演梗概集、および2000年度日本建築学会近畿支部研究報告集に発表したものをもとに加筆、修正を加えている。

* 大阪工業大学工学部建築学科 研究生・博士(工学)

Research Student, Dept. of Architecture, Fac. of Eng., Osaka Institute of Technology, Dr. Eng.

はじめに年代別に萩藩寺社建築物における規制について考察する。萩藩寺院における規制は、主に享保期に整備されていたと考えられる(表-1)⁷⁾。享保3(1718)年、萩藩当役および当職から、各宰判の代官へ通達された規制は、以後の規制を知る上で重要であるため、長文であるが記載する⁸⁾。

〔史料1〕

一新地寺院建立の儀聖御制禁、諸国一統の儀候、然如於御国中古断絶の寺院、或は寺号或本尊等残居候分追々再興の願有之候得は被差免来候、自今已後殿本尊・什書等残居候ても古跡の寺号取立候儀聖不被差御許容候事
 付、寺敷御除有之分、又は家数余多有之在々近郷二において寺一字も無之所等の儀は、於相願は依品、可被差御許容候事
 一御国中寺院及大破、造替仕儀節坪数増、結構の造替仕儀停止被仰付候、然は新古の差図を以奉行所入申出、造畢の後引合見分を可受候事
 付り、ひち木造より上の作事組物等仕候儀、天下よりの御法度ニ候間堅可為無用候、然とも有掛りの堂塔組物有之、或古立候ニ付て造替、或自今以後火災ニ付令焼失、追て造替の儀は各別の儀ニ候間、其段申出候ハ、檢儀の上可被差免候事
 付、檀方の位牌置所等、無拠造足の儀は各別の儀ニ候間、是又奉行所申出可受差図候事
 一堂塔新規ニ取立候儀有之候共、自今已後九尺四面ニ不可過候、尤其趣奉行所え可申出候、檢儀の上品ニ依て可被差免候事
 付り、組物等被差留候儀、亦是造替の儀寺院可為同前候事
 右の通被仰出候間、向後右願の儀於有之は寺社奉行、其外寺院支配の面々より申出候上可及沙汰候、已上(以下略)

規制は「ひち木造より上の作事組物等仕候儀、天下よりの御法度ニ候間」⁹⁾など、基本的には幕府の寛文8年令を部分的にうけていたことを示すが、梁間の規制や小棟作りなどの規制はみられない。規制内容は多岐に渡るが、第一条では新しく寺院を建立することを「諸国一統御制禁」としながらも、①中古断絶の寺院、あるいは寺号、本尊などが残っている場合、もしくは②家屋が多くあるものの、近郷に寺院が一字もない場合は、事例により寺院再興を許可するとしている。

次に寺院が大破し、再建を行う際に坪数を増し、結構な造営を行うことを禁止すると共に、作事申請を行う際には「新古の差図」を寺社奉行所へ願ひ出、成就の上、見分を受けるよう規定している。一方「ひち木造より上の作事組物」を「天下よりの御法度」としつつも、もともと組物を有していた堂塔が、火災などで焼失したのち、改めて再建する場合には、檢儀の上これを許可するとしている。また建物の規模については、位牌置所についての増築について、奉行所へ届け出、指導をうけることを条件に許可するとしている(以上第二条)。また新規に堂塔を建てる場合、その規模の上限を九尺四面とする旨が規定されている(以上第三条)。

さてこうして取り決められた規制は、享保4(1719)年、実際の運営において生じたと考えられる問題点について、寺社奉行が当職に対して行った伺いによって具体的なものとなる。この伺いは箇条書されているが、(第一条)では「寺院堂塔有掛りの分及破損候故、如元少も不相変造替の作事」については寺社奉行の聞き届けにより許可されること、続く(第二条)では「同坪数をハ増不申候へ共、住居を替建替の分」については、寺社奉行に何うべき旨が当職から回答されている。また(第三条)「有掛の寺院、住居替の儀」、および(第四条)「寺院有掛りより少く仕、造替の分」については、寺社奉行聞き届けより許可し、(第五条)「同有掛の分、臂木造より上の作事」については、寺社奉行へ何うべき旨が取り決められている。さらに作事成就ののちの見分については、萩内は御目付衆が、在々については御所務代が見分を行うよう規定されている。

ところで享保5(1720)年「寺院作事の事」には、当職、当役が郡奉行を通じて、各宰判の代官へ規制の徹底を通達している。こ

表-1 萩藩寺社建築物における主要建築規制

年代	西暦	表題	文書番号
享保3	1718	覚(寺院作事の事)	40-32-1
享保4	1719	寺院作事の儀ニ付御伺仕候事	40-32-1
享保5	1720	(寺院作事の事)	40-32-1
享保6	1721	覚	40-32-1
享保12	1727	作事願書の大格	40-32-1
享保13	1728	(寺社建立并再建の事)	40-32-1
享保14	1729	覚(寺社家作事見分の事)	40-35
享保14	1729	社作事之儀付而御伺候事	40-32-1
享保17	1732	享保四年寺社奉行より寺院作事伺之内	40-32-1
享保21	1736	覚	40-32-1
元文5	1738	覚	40-32-1
寛延2	1749	覚	40-32-1
寛延3	1750	覚	40-32-1
明和9	1772	覚(寺社作事の事)	40-35
天明6	1786	覚(寺社新作事基石の事)	40-159
文化5	1808	覚(品定の事)	40-159
文化11	1817	ナシ	40-32-1
文化12	1818	覚	40-32-1
文政7	1824	覚	40-32-1
天保6	1835	(御家来中井寺社新作事差留の事)	40-159

(注釈) 表題のうち()内の表題は山口県文書館編『山口県史料 近世編 法制(上)(下)』1977年に記載された表題であり、元史料の表題ではない。また文書番号は山口県文書館編『山口県文書館史料目録』による。

では先に述べた享保3年(1718)の法令遵守を徹底させると共に享保3(1718)年の規制以外に、新たにいくつかの規制を設けている。まず「(前略)住居替ニ依て、至極無拠貳有之候ハ、惣坪数の内にて五坪迄相増候分ハ可被差免候(後略)」と、五坪までの増築を場合によって許可している一方で、「(前略)掘建家并土蔵等の坪数を以客殿・庫裏・書院等ニ相加、坪数相増候儀不相成段ハ勿論の儀候事(後略)」と掘立家や土蔵などの申請坪数を、客殿、庫裏、書院などの坪数に加えることを戒めている。さらに「一自今已後堂塔并寺火災、又は大破等ニて取払、早速造替不相成分は古寺の差図を以寺社奉行え相届、裏書取置、追て再建仕ニおいてハ其節右の差図相添、奉行所え可相願候事」と、火災あるいは大破などにより堂塔を取り壊したもののすぐに再建の困難な場合は、取り壊した建物の差図を寺社奉行へ届け出、裏書を取り置き、改めて再建の際はこの裏書の書かれた書類を普請申請書類に添えて奉行所へ願ひ出ることが規定されている(以下この書類を「御裏書物」と呼ぶこととする¹⁰⁾。

さらに5年後の享保10(1725)年には、萩藩内の「御家頼中」に対して、座敷廻りや屋根廻りなど普請申請の際の届け出義務基準、および作事届け出から、成就・見分に至るまでの詳細が規定されている。この規定は2年後の享保14(1729)年に寺院に対しても触れ出されているが、特に注目すべきは普請申請から見分に至るまでの手続きが明確に取り決められている点である。

〔史料2〕

(前略) 右作事の儀、差図を以被相願候如二、^A 造作等の事区々有之如何ニ候条、此以後は右 二配候儀々相違無之様ニ委細差図ニ書付可被申出候、左候て被差免、作事相願候上儀御目付衆え相達、可被受見分候、尤差図寄通の内、追々二見分を讀被 申聞敷候事
^B 但、作事ニ取付候以後、差図の内略仕、又は輕ク仕候分は勝手次第不背之、其段改て願二不及候間、見分の節御目付衆え可被相達候、尤右ニ付紛候儀無之様可被仕候事
 一作事の願被差免候分、年を経候ても見分の沙汰延引の衆も有之様ニ相聞、不詰の儀ニ付物定 被仰付候間、^C 自今以後は被差免候月より十式ヶ月を過候ても作事不仕候衆の儀は右の願捨り 二被仰付候、然は御定の月数の内ニ作事不相成候ハ、其取支配方を以相相願、追て取立の儀 是改差図指出、如最前相願可被申候、若月数過候迄作事不仕衆、其届於無之は可及沙汰候、^D 且作事ニ仕懸り成就不仕内、御定の月数過申儀ニ候ハ、其段御目付衆え被相達、二三ヶ月の儀は延引不苦候事

つまりこの条文の前部分で具体的に設定された、普請申請の届け出

義務行為を差図に記載し届け出ること、また作事が成就した上で目付による見分をうけることが取り決められている（下線部A）。

また差図よりも軽い作事を行う場合は、勝手次第であるとしている（下線部B）。さらに作事願いが許可されてから、成就するまで2、3カ月の猶予を認めるものの（下線部D）、原則として作事成就期限および作事許可の有効期限を12カ月としている（下線部C）。この萩藩における普請申請書類有効期限12カ月は、大坂町奉行所の普請申請書類有効期限が10年であることに較べて極めて短いといえよう¹¹⁾。

一方享保13（1728）年「寺社建立并再建の事」では、はじめて神社に対して明確な規制を設けている。ただし規制内容はいずれも寺院に対する享保3年の規制を神社に対しても徹底する旨の記載であった。また享保14（1729）年8月「社作事之儀付而御伺候事」では、神社作事に対して寺社奉行栗屋勘兵衛、和智次郎兵衛が、当職である毛利筑後ほか2人に伺いを出している。

〔史料3〕

社作事之儀付而御伺候事

此段可為本書之通候事

一社造管等之儀付而、去年八月御書付を以被仰出寺院之儀者、近年被仰出候仕無相違との御事御座候、寺院作事相願候節沙汰筋之儀ニ而享保四年一ツ書ニ而御伺仕御肩書を以被仰出候社作事相願候節茂、右寺院之略ニ可被仰付哉之事

此段可為本書之通之

一寺院造替之節仕居替ニ依之至極無誤候ハ、惣坪数之内ニ而五坪迄相増依分者可差免之通享保五年之御書付相見候、社造替之節も無誤候有之候ハ、有懸り之社ニ應シ少々坪数増候分者可被免哉之事

右御肩書ニ被成可被下候以上

享保十四酉八月

栗屋勘兵衛 判

和智次郎兵衛 判

毛 筑後殿
毛宇右衛門殿
毛伊勢殿

これによると、①神社についても寺院に準じた届け出を作事の際に行うこと、②寺院同様社造り替えの節に特別な訳のある場合、「有懸り之社ニ應シ、少々坪数増候分」についてはこれを許可としている。このことは萩藩がまず寺院建築物に対して規制を強化し、これに続くかたちで順次神社建築物に対しても規制を加えていたといえよう¹²⁾。

さて寺院建築物について、同年の覚「寺院家作事見分の事」には、作事の期限を遵守すること、および「向後の儀は素立坪数上葺相済候ハ、見分可被仰付候間」と、上葺が済み次第、見分を受けるよう指導している。

一方享保17（1732）年には、臂木造りについて寺社奉行から当職への伺書によって伺い知ることができる。

〔史料4〕

「（前略）右之ケ條臂木造より上之作事与有之所臂木作り迄ハ同二不及候哉、臂木造を初及候候哉之段、此間御問合御座候申候如、組物と可致ため之土台ニ仕懸ケ候臂木之分者、組物之作事ニ而候故、被相同候様二との儀御座候、柱之頭ニ臂木計をかまへ桁を渡し候者臂木作り与申候ハ、家之つよミ□為計リ二構へ候ひち木□候故不及候此段御挨拶申候様由との儀御座候事（後略）」

つまり組物を載せる臂木については認めず、柱頂に直接臂木をのせる臂木についてはこれを容認している。この臂木造りは幕府寛文8年令同様舟肘木であると考えられるが、舟肘木が構造的観点から作事が認められている点は、当時当該地域において舟肘木が構造的に有利であることを認識したものであることを示しており注目できよう。

また享保21（1736）年の覚では、寺院に対し寺社奉行から当職への問い、「（前略）元より堂作り之分坪数を減シ、建替候時者小く相成候へ共、平板屋或ハ茅葺等之在家作りを坪数を少々減シ候茂、寺作り二仕候時者見入茂大く相成候、向後在家作り之寺を堂作り二建替節者、坪数者少々減シ候共御伺可仕哉之事（後略）」に対し当職は、「此段本書之通、在家作り之寺を堂作り二建替之節者、坪数減候共相伺可被申候事」、つまりもともと堂作りの分の坪数を減らして建て替えることについては、寺社奉行の聞き届けにより許可されるが、もともと平板屋、あるいは茅葺の在家作りを坪数減少の上、堂作りにする際には、寺社奉行に伺いをたてることになっている。このことは例えば真宗寺院などに多くみられる道場形式の寺院が、本堂の体裁をとる場合には寺社奉行へ届け出る必要を示していると考えられる。

元文5（1738）年には、同じく寺社奉行から当職への伺い「（前略）寺院位牌置所物置其外老坪二不足之作事仕候分者、不及願可被差免候哉之事（後略）」に対して、当職はその通り指導する旨、つまり位牌置所、物置、その他一坪未満の作事については、寺社奉行への届け出なくても作事を行ってよい旨を回答している。さらにこの元文5年になって、向拝における組物に対しては、三ツ斗に限りこれを差し免じている。

こうして主に享保期において相次いで取り決められた寺社建築物に対する規制は寛延2（1749）年の覚、あるいは明和9（1772）年の覚においてまとまった形となるが、いずれの規制も主に享保期に整備された規制をまとめたものであるといえ、萩藩における寺社建築物に対する規制は18世紀中期～後期に至ってほぼ網羅的に整備されたと考えられる。

2. 「諸士御仕置帳」にみる手続き上の違反

2-1. 作事許認可申請段階の規制違反（「御裏書物の紛失・不提出」）表-2

前章において、萩藩の寺社建築物における規制について考察したが、本章では「諸士御仕置帳」を用い、申請手続き上の規制違反について、①作事許認可段階のもの、②作事認可後の規制違反、以上2つに分類して考察する。

さて先述したが、萩藩では普請を申請する際、現在の建築物の規模などを表した書類を提出する必要があった。また既存の建築物が焼失あるいは大破した場合には、焼失・大破した建築物に関する次のような書類を寺社から庄屋を介して寺社奉行所に提出し承認を受ける必要があった。

〔史料5〕¹³⁾ 表-2の事例1.0.

火災ニ付指図を以御届申出候事

本堂五間半二六間半肘木作りにて窓板敷天井、屋柵裏板内陣御拝組物屋柵茅葺ニ、惣坪数御拝共三拾八坪貳歩式（欠落）

表-2 作事許認可申請段階の規制違反

事例番号	寺社名 (所在または宗派)	年代	文書番号	建築物種別	内容概要	処分あるいは建立条件
01	常昌寺 (山口俊龍寺末寺)	宝暦8 (1758)	51-15 87の42	本堂	延享2 (1745) 年の洪水によって、本堂 (三間半二五間惣坪数拾七坪半) が破損。そこで解除し、本尊を番人小屋に安置していた。 ところが本来解除の旨を寺社奉行へ届け出なければならぬにも関わらず、先住は寺社奉行へ解除の届け出を行わず、破損本堂を解除してしまい、結果として再建を行いたくにも関わらず墓書を所持していない。	遠慮15日、坪数17坪半を2割引14坪再建。
02	龍福寺 (山口)	宝暦8 (1758)	51-15 87の42	衆寮	享保11 (1726) 年7月5日に大風で吹き倒れた、梁行4間、桁行5間惣坪数22坪の衆寮にかり、まず①旧衆寮の木材を用いて、梁行4間桁行5間1尺5寸 (坪数21坪) の御堂を取り建て、さらに②境内にある梁行2間桁行3間1尺5寸 (坪数6坪半) の観音堂が宝暦5年8月24日の大風によって、おびたく破損しているのを、これをさきの御堂に引き足し、衆僧の居住所を兼ねた建築物建立の旨を願い出た。ただしこの大風によって吹き倒れてしまった衆寮の寺社奉行発行の墓書を紛失。	遠慮、惣坪数22坪を18坪。
03	春日社	宝暦9 (1759)	51-15 87の53	春日社	宝暦9 (1759) 年4月24日、春日社が大風によって吹き崩された。そこで宮司は7月16日に有期3間に出2間半、7坪半の坪数居石の建物再建を寺社奉行へ願い出たが「寺社奉行墓書不取置」。	遠慮、坪数を2分引きの6坪に下方修正することを条件。
04	万福寺 (奥阿武郡嘉年村)	宝暦9 (1759)	51-15 87の53	庫裏	宝暦9 (1759) 年、万福寺の庫裏、「嘉武間半梁四間、坪八拾坪、南北屋根下壁面折入二、南側一尺八寸長老間半坪二四分一朱五余四拂北側軒下壁面折入一尺八寸二式間坪二五分五朱四口、本堂より取付の釣屋長八尺四寸五分横間坪二坪三分二以上惣坪数拾貳坪式合六九才」が大風で吹き崩されたが、当時は無住であり、また貸地であったため、建立することができなかった。その後、住持人が決まったため、さきの坪数でもって再建しようとしたが、吹き崩れた際に墓書を紛失していた。	遠慮。9坪までの願い出再建に変更。
05	本光院 (奥阿武郡宇生賀村禪宗)	宝暦12 (1762)	51-15 87の67	本堂	宝暦8 (1758) 年正月5日に本堂 (五間梁二六間石居茅葺、惣板数坪数三拾式坪惣板天井)、釣屋 (式間梁二三間石居茅葺、惣板数坪数六坪惣板天井)、庫裏 (式間半二五間石居茅葺惣板数坪数拾二坪、惣板天井、坪数五拾坪) 以上が焼失。宝暦12 (1762) 年になって再建願いを行ったところ、焼失の節届け出を行っていなかった。	遠慮10日、50坪のうち10坪減少、40坪にて許可。
06	通照寺 (瀬戸崎浦真宗)	宝暦13 (1763)	51-15 87の73	門	表門が焼失したので、桁行8尺5寸、梁行6尺5寸の四足門を御国松の榎木、古木によって建て替へたい旨を願い出、許可された。もっとも先年までは二重屋根の鐘樓門であったものが、類焼にあったので、その旨を寺社奉行へ届け出たはずであったが、御墓書を取り置いていなかった。	遠慮、金百疋。
07	般若寺 (上関才判大野村真言宗)	明和元 (1764)	51-16 97の19	十王堂	十王堂 (式間梁二三間) は、去る享保8 (1723) 年に焼失したので明和元 (1764) 年に再建を願い出たところ、本来ならば焼失の節に寺社奉行へ届け出た際の墓書を取り置くべきところ紛失。	遠慮10日、坪数七坪半のうち一坪減少。
08	九品寺	明和2 (1765)	51-16 97の26	客殿	九品寺客殿 (七間半二五間半御拝あり) が享保17 (1732) 年に類焼。そこで仮木屋を建て、本尊ならびに位牌を安置していたものの、年久しくなり柱、そのほか屋根廻り破損。また風雨の際、勤めなどに差し支わりがあるため、以前の規模の本堂 (坪数40坪半) の再建を申し出たところ、焼失之御届の墓書を紛失。	遠慮。現在の仮堂42坪のうち8坪減らし、34坪。
09	芦原寺 (佐波郡三田尻禪宗)	明和5 (1768)	51-16 97の67	門	門 (桁行丈五尺五寸、梁行七尺三寸地福立戸式枚、實屋脊瓦葺西向南五尺縁りへい北方へ本門二派四尺小門柱式本戸老朽開口上瓦) が、宝暦3年九月に大風によって吹き倒れた。この旨を不届けゆえ処分。	遠慮10日、金百の過料。坪数の減少はなし。
10	宝泉寺 (美濃郡)	明和5 (1768)	51-17 65の52	本堂 庫裏	明和5 (1768) 年11月20日本堂と庫裏焼失。当分居所もないので、焼跡へ掘立小屋を建てた。このたび再建を願い出たが、焼失の節の御墓書を紛失。 (「右此度本堂庫裏建立之儀申出候、前歳焼失之節之寺社奉行墓書取失之節二候得共、御了簡を以三拾八坪等之内、三拾坪迄者願出次第可被差免候事」)。	遠慮15日、38坪の内、30坪までは願い出次第被差免。
11	安東寺 (大嶋郡安下庄真宗)	安永3 (1774)	51-17 65の30	本門	本門 (九尺梁式間) が、元禄年中に破損したため、解体した。のちに安永3年二月に至り、手軽く建立したい旨を願い出たものの、解体の際の届け出の「御正據物」を取り置いていなかった。	記載なし。
12	観音寺 (山口禪宗)	安永5 (1776)	51-17 65の31	本門	山口禪宗観音寺「本門九尺式間彫物等夜御座候」が、宝暦元年八月二四日に大風により吹き倒れたため、解除しておいた。しかし本門なしでは不終まりなため、再建願いを行ったところ、解体の際の墓書を取り置いていなかった。	九尺式間坪数三坪の門を再建 (彫物なし)。
13	神尾寺 (大嶋郡久賀村禪宗)	安永7 (1778)	51-17 65の39	門	先年門を解体したにも関わらず、その際届け出、取り置いておくべき墓書を取り置いていないことが再建の際に判明。	遠慮。「金百疋、彫物等無用二仕、輕相調候」。
14	正学院 (前大津三隅下村)	安永9 (1780)	51-17 65の50	阿弥陀堂	阿弥陀堂 (九尺四間) 再建申請を行ったところ、以前焼失の際に、寺社奉行様御墓書を所持していなかった。	遠慮、金百疋過料。
15	口津寺権八幡宮	安永9 (1780)	51-17 65の52	神輿置所	口津寺権八幡宮の神輿置所 (表五間入式間坪数十坪茅葺) が、寛保三 (1743) 年亥ノ八月十三日、大風によって吹き倒れた。このままでは神輿を置くところがないので、古道具を取り合い、不足の分は榎木をもって再建したい旨を願い出たところ、大風によって吹き倒れた際、寺社奉行へ届け出、承認された証明を紛失。	遠慮10日、坪数2坪減少の8坪に。
16	生福寺 (川上村禪宗)	寛政6 (1794)	51-19 62の22	門	川上村禪宗生福寺の門が住職先々代のころ (安永年中) の長雨によって、「寺院岸高」のところが崩れ、門も崩れ落ちた。容易に取もできないので、しかたなく解除、地場戻しを行った旨を、早速差圖をもって寺社奉行所へ届け出、「御墓書」を頂いた。のち寛政6 (1794) 年になって、門の再建を願い出ようとしたところ、「御墓書」を紛失。	遠慮、金百疋。
17	清光寺廣開院	寛政9 (1797)	51-19 62の33	墓向座敷	清光寺廣開院の墓向座敷 (惣坪数68坪) を明和6 (1769) 年先々住が申請、許可を得たがまもなく死去。以後入用もなくなり、修理も怠り、取り除いたものの寛政9年になって縁取組め、座敷が必要なので、再建願いを行ったところ、取除きの「御墓書之御正據物」を取り置いていなかった。	遠慮、68坪のうち55坪については「願出次第再建可被差免候事」。
18	明榮寺 (小郡井関村真宗)	寛政11 (1799)	51-19 62の50	本門	本門その他本堂、庫裏が寛延2 (1749) 年9月の類火によって一同焼失 (「焼失仕候二付、其節御届申出、寺社御奉行衆御墓書被差出候」)。宝暦10 (1760) 年に本堂については再建。しかし「然処門無御座候而八、第一中より差間申候」ゆえ本門 (九尺二式間四ツ足門開戸式枚、三ツ斗屋脊裏板角垂木、尤為火用心此度物本瓦葺二御国松榎木) の再建を計画。しかし御墓書物紛失。	遠慮、金百疋の過料。「改而建立之儀差圖を以可申出候事」。
19	菩提寺 (小郡秋穂令真言宗)	寛政13 (1801)	51-20 31の1	庫裏	庫裏建立の際、以前焼失の際の墓書を紛失 (焼失之寺社奉行墓書取失之由)。	遠慮。「御了簡を以、式拾五坪之内式拾坪迄八願出次第可被差免候事」。
20	地藏院 (都濃郡花岡八幡宮別當職)	享和3 (1803)	51-20 31の25	本門である薬医門	本門である薬医門 (長寄丈老尺、幅老丈、裏板垂木、本瓦葺、組物、左右袖小門付、裏五尺幅四尺の分) の修理を怠り「柱其外朽損、危き程二御座候」となった。また当宮が寛政元 (1789) 年夏に「巡見御上使、御通路二付、當寺御下宿被仰付」ゆえに、本門建て替へも間に合わないで、御茶屋の中門 (長五尺五寸、幅同断) の解除の分を当分表門として建てた。しかしその仮門も近來、大破したので、以前之通手軽く建立したいと再建願いを行おうとしたものの、以前の門解除の際の届け出、御證據物 (御墓書) を添えて願い出るべきところ、先代急病ゆえ「御居落」。 また一方で仮門のまま再建だと、殿様上下之節はもちろん、荷物のおし入れに差し間えるので、先年の薬医門を再建したい旨を願い出。	遠慮。「金百疋、彫物等無用二仕、輕相調候ハ」改而差圖を以可申出候事」。

表-2 作事許認可申請段階の規制違反

事例番号	寺社名(所在地または宗派)	年代	文書番号	建築物種別	内容概要	処分あるいは建立条件
2-1	建立寺(山代市門村、浄土宗)	文化7 (1810)	51-21 60の24	薬師堂	薬師堂(武間四方、惣坪数四坪、惣礎、松板天井、四方屋根裏惣松板、茅葺、板座)が「去ル奉和元四年十一月、類火二而焼失」ゆえ「當年再建奉存候、材木之儀ハ御國松雑木取合、建立仕儀奉存候間」と考えたものの、焼失の際の御隠據物を紛失していた。	遠慮10日。「御了簡を以金百疋之過料」。
2-2	正圓寺(厚狭郡船木市真宗)	文化8 (1811)	51-21 60の33	本門	本門が宝暦8(1758)年寅四月十七日大火類焼。このたび再建を願ひ出たところ、裏御隠據物を取り置けていなかった。	遠慮10日、金百疋之過料。「改而建立之儀可願出候事」。
2-3	梅雲寺(文嶋郡津和野)	文化9 (1812)	51-21 60の39	本門	文嶋郡津和野梅雲寺「當寺本門有掛り、入四尺寸、内法八尺、築匠門造、角垂木式枚扉、石居建、上屋本瓦葺」が「明和武四年、大風雨之節、及破損二付、取除申候」ゆえ、この度「其跡江坂小門再建仕度」と考えたものの、「已前取除之節、御隠之御隠據物無御座」。	遠慮。「御了簡を以、金百疋之過料、彫物等無用仕候儀ハ、改而差図を以可申出候事」。
2-4	西正寺	文化10 (1813)	51-21 60の48	本門	「此度損所、取繕之所之通、本門式間老尺四方、坪数四坪六合三勺九才、柱六本葉、石惣かづら石、開戸、式枚、惣角垂木、組物なし、屋根惣茅葺」を「小門桁行六尺、柱二本、老枚引戸ニして建調」と再建を願ひ出たものの、「再建之儀申出候、然處其部寺社奉行裏書物取置かす」。	遠慮、金百疋之過料。「改而建立之次第可願出候事」。
2-5	蓮池院	文化11 (1814)	51-21 60の50	屋敷寮	蓮池院の寮「有掛坪数五坪五合、屋根板割、垂木下地類丸木取交、垂木勝手瓦葺天井并惣口材御國松雑木作り」惣坪数五坪五合を、7坪に増坪願をおこなったところ許可された。しかし資金不足ゆえ6坪2合5勺で願ひ出たところが、5坪5合解除の際の証明がない。	遠慮、金百疋之過料。「有懸り坪数五坪五合被差免、増坪之儀者不及沙汰候間、差図を以可願出候事」。
2-6	専正寺(南嶋福井村真宗)	文化12 (1815)	51-21 60の51	本門	「本門再建之儀、別紙之通御願申上候」ところ「去ル安永二已年校門其外焼失」の際、御裏書物を紛失(其後本堂再建之節紛失)。安永に燃えたのは校門であるが、願ひ出は御裏書物紛失のため本門を申請(此度御沙汰之趣二付候者校門等之御願も難申出二付、本門本柱式本口柱より柱迄、内法九尺五寸冠木作り、控柱式本、扉式枚阿開戸付、屋根裏板角垂木本瓦葺、本門之右脇桁行六尺五寸、内小門柱より柱迄四尺四寸式尺五寸御柱式本控柱式本開戸、屋根本瓦葺裏板角垂木、本門之左脇板角桁行六尺五寸柱式本控柱式本屋根本瓦葺、裏板角垂木本門小門共二惣地覆建、たゞ石居材木之儀者、御國松雑木取合建調仕度)。	遠慮。「御了簡を以、金百疋之過料」。
2-7	建立寺(山代御幸判、市向村)	文化12 (1815)	51-21 60の52	薬師堂	薬師堂が享和元(1802)年11月類焼。その際正據物(御裏書物)を紛失したが過料にて再建を差し免じられた(文化7年)。さらに文化7(1810)年11月に再建願出。新古差図をもって願ひ出すよう指導をうけたものの、その後願ひ出延引。	遠慮。
2-8	妙湛寺(小郡下関御幸)	文政元 (1818)	51-21 60の60	本門	本門「梁行八尺、桁行九尺、四ツ足門、三ツ斗作り、式重垂木、石居建、屋根本瓦葺二而御座候処」が、「宝暦十三年八月七日之大風二吹倒候二付、其節後代官所江御願申出、取除候處、正據物置不申不親之故」が判明。しかし「往古之門跡二只今柱之根等茂残り居申候」、また「門無御座候而者、往還近辺火用心旁、至極不メリ御座候」ゆえに、「此度八桁行九尺、梁行五尺七寸二て、組物彫物等を除、屋根裏板角垂木、勝手瓦葺、式枚扉、惣石居、材木之儀ハ御國松雑木作り二て、限分手輕建調仕度」を申請。	遠慮5日。「御了簡を以、金百疋之過料」。
2-9	正福寺(山口真宗)	文政2 (1819)	51-22 18の01	鐘樓	「當住裏書物不取置分ハ、日数違候例と相見候付、其時之檢儀之事、尤文化八年厚狭郡船木正福寺先住代二而候處、遠慮十日相立、金百疋之過料を以被差免候」。	遠慮10日、金百疋之過料。
3-0	善福寺(山代市向村御幸)	文政2 (1819)	51-22 18の03	本堂 庫裏	本堂、庫裏、其外亭和二年及焼失。その後「此度本堂再建願出候」ところが、「寺社奉行裏書物取失候」ことが判明。このうち本堂については42.25坪の内、2割だから本来だったら、8.441坪の減少であるところ、1.8坪は裏書物の紛失以前の仮建てで、すでに建て置かれていたので、残り24.25坪の内、4.841坪は許可しない。	遠慮、坪数2割減少。
3-1	玄尊院(吉敷郡深野村御幸)	文政2 (1819)	51-22 18の03	本門	宝暦5(1755)年本門(本門梁行老丈式尺、桁行老丈四尺六寸、四ツ足門、三ツ斗角木造、式重垂木出組、葛段大小九寸、破風懸魚所々彫物有之(欠落)石屋根瓦葺)が大風によって吹き倒れたため、取り除いた。此度再建を申し出たところ、寺社奉行承録の裏書物を取り置けていなかったことが判明。結局「遠慮申出候、御了簡を以、金百疋之過料を以、被差免候條、改而再建之儀可願出候事」となった(新たに申請した再建本門の規模は以下の通り。「一本門桁行老丈式尺五寸梁行老丈之事、一柱数控柱柱角柱二而四本候事、一屋根本瓦葺裏板角垂木之事、一垂木類筋入之事、一式枚扉之事、一惣石居之事、一材木御國松雑木取合之事。」)。	遠慮、金百疋之過料。
3-2	常栄寺	文政3 (1820)	51-22 18の05	祠堂	祠堂(一祠堂前後庇廊下共二、惣坪数四拾八坪之事、一屋根惣勝手瓦葺、裏板角垂木、裏之所壁を付、垂木類筋入、懸魚腰懸根付之事、一惣板天井板座之事、一肘木造り之事、一材木御國松雑木取合之事。)再建願ひに際し、文化11(1814)年に焼失した時の御隠據物不取置が発覚。	遠慮10日、過料金百疋。
3-3	西平寺(真宗)	文政3 (1820)	51-22 18の06	本門	延享2(1745)年に解除の本門の再建願ひの際、寺社奉行の御裏書物を取り置けなかった。(右本門延享武年解除願ひを以、此度再建申出候、然處先年寺社奉行裏書物不取置、迷惑之由二而遠慮申出候、御了簡を以、金百疋之過料被召上遠慮被差免候條、改而差図を以、可申出候事)。	遠慮、金百疋之過料。
3-4	清水寺(山口真言宗)	文政6 (1823)	51-22 18の09	鐘樓	鐘樓(四本柱礎出組手先造柱之間四方老丈余、屋根千鳥破風入茂屋作り式重垂木、本瓦葺板天井)が、宝暦13(1763)年末の8月の大風によって吹き倒れた。その際、先々住が(御裏正據物)を願ひ出していなかった。しかし「鐘樓無而者、寺役差間々御座候」につき、この度鐘樓を再建申請(柱四本礎三斗作り柱之間八尺、四方上下真を入、石垣切石取合を屋根四方式軒干、角垂木惣裏板本瓦葺二て材木御國松雑木取交、至而手輕再建仕度)。	遠慮5日、金百疋之過料。「手輕建調儀ハ、改而差図を以願出候様」。

一惣木道具御國松雑木新古取合之事

一肘木造り之事

一屋根惣裏板之事

一内陣御拝組物之事

一惣石居之事

一座敷板敷之事

右美禰郡大嶺村當寺本堂右通仕候二付、先達而建替御断申上、新古差図同様に作事被遣御許容此間通二大概相調申候故、成就御居仕御見分を受可申と奉存候内、昨廿日之暮方不慮二自火ニて本堂、庫裏、長屋、物置等不殘焼失仕候、尤本寺寶物等者取出候、鐘樓門之儀も有懸り之分ニと仕火災被連申候、改而指図を以御届申出候條、此後建立仕候節ハ此辻を以作事被遣御許容候様二宜被成御沙汰(欠落)

明和五子ノ

十二月廿一日

大嶺村真宗

寶泉寺

御庄屋

沢村三郎左衛門殿

この史料が「御裏書物」であり、書類は寺社側から庄屋、大庄屋、代官、郡奉行を経て寺社奉行所へ提出された。萩藩でこの御裏書物を必要としたのは、既存の建築物と同規模、同仕様のものであれば、再建することが認められていたためであると考えられるが(後述)、寺社側がこの御裏書物を取り置けなかったり、紛失した場合は規制違反となった。この御裏書物の不取り置き、不届け違反は、後述する作事許可後の規制違反に較べ、建坪数の減少や罰金などの厳しい処分であった。

さて「諸仕御仕置帳」に、御裏書物の紛失が判例として記載されている初出は宝暦8(1758)年である。また御裏書物紛失が問題と

表-3 作事認可後の規制違反

事例番号	寺社名(所在または宗派)	年代	文書番号	建築物種別	内容概要	処分あるいは建立条件
01	長壽寺(山口)	享保15 (1730)	51-09 31の23	本堂	山口長壽寺の作事が物切延引。	遠慮。
02	陸京寺	享保18 (1733)	51-09 31の30	本堂	陸京寺作事、物切延引。	遠慮。
03	吉福寺(大津郡蔵小田村)	享保21 (1736)	51-09 31の31	本堂、庫裏	本堂と庫裏の作事申請許可を受けているにも関わらず、本堂作事を行い、庫裏については「物切延引」にも関わらず、届け出を行っていない。	遠慮。
04	西蔵寺	元文3 (1738)	51-09 31の31	本堂	作事を願い出たにも関わらず物切延引につき遠慮。	遠慮5日。
05	瀬戸崎祇園社	元文5 (1740)	51-10 14の07	御旅所	御旅所作事については、享保5(1720)年に願いが許可されていたが、「入用銀心当相違」があったため作事が延びていたにも関わらず、作事延引届けを元文6(1741)年に至っても願い出ていなかった。	遠慮10日。
06	大等坊(三田尻)	元文5 (1740)	51-10 14の08	本堂	元文5(1740)年5月14日、三田尻大等坊の作事が差し免じられたが、期限を過ぎても作事完了しないため遠慮。	遠慮。
07	明宗寺(伊佐村真奈)	元文5 (1740)	51-10 14の08	本堂、庫裏、鐘樓門	元文元(1736)年11月26日、伊佐村の出火の際、明宗寺本堂、庫裏、鐘樓門が類焼したため、同3年2月に鐘樓門の建立願を申し出、3月に差し免じられた。のちに見分をうけるべきところ、元文5(1736)年の期限に至っても作事完了の届け出を行わなかったため遠慮。	遠慮。
08	津布田村八幡宮	元文5 (1740)	51-10 14の08	神殿、舞殿、釣屋	神殿、舞殿、釣屋が享保11(1726)年3月15日に焼失した。このうち舞殿については、まず同年の7月に建立を断り出、差し免じられた。また神殿、釣屋の建立については、享保19(1734)年の正月に願い出、差し免じられた。しかし神殿については成就したが、釣屋については困難ゆえ、なかなか成就にまでこぎつけられなかった。本来ならばこの旨の届け出を行わなければならないものの、社人の代替わり、あるいは庄屋の代替わりなどのために、元文5(1740)年まで延引届けを出すことが出来なかった。	遠慮。
09	善立寺(大瀬村真奈)	元文5 (1740)	51-10 14の09	本堂	善立寺が山瀬という所へ所替のため、堂を建立したい旨の願い出を、元文2(1737)年2月に申し出し、同年3月に願い通り差し免じられたものの「作事二物切之内成就之届」を元文5(1740)年になっても届け出ていなかった。	遠慮。
10	南明寺	寛保元 (1741)	51-11 10の01	本堂	元文4(1739)年に仏壇の所、一坪増築を申し出、許可。しかし「同年之五月二至り職人之手を茂難相成不勝手之(欠落)有之由二而」のため作事延引ゆえ、延引届を元文5(1740)年に断り出、許可を得た。しかし作事が許可されてから十二ヶ月のうちに作事が隅々なければ、願いは無効になるにも関わらず、さきの延引の断りのみで手続きが済むと考え、願い無効願い(捨り之御断)を申し出ていなかった。	遠慮。
11	法雲院(龍昌院塔頭)	宝暦10 (1760)	51-16 87の56	地藏堂	地藏堂建立の願い出が宝暦9(1759)年7月に願いの通り、差し免じられた。のち宝暦10(1760)年正月二十二日には作事で地藏尊を安置、成就したのも関わらず成就届けは「6月切之由」であった。	遠慮。
12	山口多賀社	宝暦10 (1760)	51-16 87の65	多賀社幣殿	多賀社幣殿仕舞の作事(増築)を宝暦9(1759)年の暮、大宮司より願い出、差し免じられたところ、作事銀子にミスが発覚(作事用意之銀子趣有之間違候而作事不儀仕付)。作事の手続きとしては、「作事仕懸候而御物切之時節相成候而も、成就不仕分ハ延引候御断申出候儀も有之候」にも関わらず、作事を中断、放棄していたので大宮司遠慮処分。	遠慮。
13	正福寺(熊毛郡宿井村海潮寺末寺)	宝暦11 (1761)	51-16 87の65	小庫裏	正福寺の小庫裏作事願いが許された後、材木願いも差し免じられた。しかし物切12ヶ月を過ぎても作事ができないため、延引届けを早々に出すよう庄屋である小田吉左衛門へ郡代官佐方彦左衛門が指導しているにも関わらず、一向に届けでないため、代官は庄屋を追い込み処分としている(「右正福寺去ル卯年作事之儀申出被差免候処、物切之内不相順及延引候御法度有之儀二付、右作事捨り二被仰付候事」)。	正福寺は作事捨り、庄屋は追い込み。
14	正福寺(前津才判通補、浄土宗)	寛政2 (1790)	51-19 62の05	本堂、庫裏	本堂、庫裏が天明5(1785)年二月に火災のため類焼した。そこで同年十月に庫裏の再建願いを申し上げたところ、差留をもって申し出すよう沙汰されたので、早速差留をもって願い申し上げるはずであったのが材木不足ゆえ、願いを延引していた。そのうち数年たち、再願いの際に、先の願いを取り消す申請を行っていなかったことが判明。	遠慮。
15	天満宮(上関才判田布施村)	文化5 (1808)	51-21 60の17	天満宮	文化2(1805)年に天満宮再建の願いを申し出たところ、新古圖をもって申し出るよう指導があったものの、年数延引。	遠慮7日。
16	信行寺(佐渡郡西ノ浦)	文化5 (1808)	51-21 60の19	本堂	信行寺再建の儀、文化元(1804)年願い出たところ、新古圖をもって申し出すように指導をうけた。さっそく差留をもって、願い出なければならないものの延引(「延引仕候年数も相立候付、改而前御断申出候儀奉存候間、先達而之御願御了簡を以捨り被仰付被下候様・・・」)。	遠慮。
17	嚴嶋社	天保13 (1842)	51-23 15の13	嚴嶋社神殿、拝殿、釣屋	「嚴嶋社神殿、拝殿、釣屋共二近來破損仕候付」建て替えを願い出許可。しかし神殿、釣屋は出来たものの、拝殿は成就しない(銀子手違い)。つまり「御了簡を以、拝殿車寄之儀者、一先作事捨り」にも関わらずこれを願い出ていない。	遠慮7日、作事捨り。
18	正然寺(佐渡郡三田尻村真奈)	天保14 (1843)	51-23 15の14	本堂	作事願出許可に関わらず、事延引につき沙汰。	記載なし。
19	覆林寺	弘化4 (1847)	51-24 02の02	庫裏其外	庫裏其外作事之儀について成就延引の旨を不届。	遠慮5日。
20	南明寺	弘化4 (1847)	51-24 02の02	本堂	本堂年久しく、柱その他が破損したので、再建を願い出たところ、弘化3(1846)年4月に許容された。さっそく作事にとりかかるべきところが、「銀子手違二相成候二付」のために、作事延引。	遠慮7日。
21	御蔵寺	明治元 (1868)	51-31 05の02	庫裏	本堂、庫裏とも安政4(1857)年焼失、同5年再建を願い出、許容。しかし「檀家之儀者引當之銀子手違ひ等仕」ため、庫裏は再建できなかった。この旨の申請取り消し(再建捨り)を行ってなかったことが判明。	遠慮5日。

なった事例は寺社建築物では34例あるものの、武家屋敷では確認できなかった¹⁴⁾。また記載された差図は、建具の有無、天井の種類、畳数など、大坂町奉行所支配地域における差図に較べ非常に詳細であり、この点からも萩藩における規制の厳密さの一端を窺い知ることができる¹⁵⁾。

次に寺社建築物のうち、御裏書物が問題となった事例34例につ

いて考察していく。

〔史料6〕¹⁶⁾ 表-2の事例11

申上候事

拙寺本門九尺梁式間にて元禄年中建立之分、及古損候所二貯無御座候、〔欠落〕代解退置申候然所二改而少々貯も御座候故、如元手輕建立仕度段當二月御断申上候、前敷方解退之時分御断申上御正據物取置申書御座候所之儀無御座候段、不氣付と受迷惑奉存候、依之差儀仕度奉存候間、此段宜被成御沙汰可被下候已上

午 大嶋郡安下庄真宗

九月四日 安東寺
神本太左衛門殿
右前書之通御座候条被成御沙汰可被下候已上
同日 神本太左衛門
右之通被成御沙汰可被下候已上
同日 松岡四郎左衛門（大島郡代官）
栗屋六郎右衛門殿（郡奉行）
右存申候已上
九月八日 栗屋六郎右衛門
及美 伊織殿（寺社奉行）
口羽 木工殿（寺社奉行）

〔史料7〕¹⁷⁾ 表-2の事例13

申上候事
當寺口門再建之御断申出候処、先住代前古門解退置候節御届不仕御裏書物取置不申不行届儀ニ付、迷惑至極奉存候、依之身柄差扣居申候間此段、宜御沙汰可被下候以上
戌ノ 大嶋郡久賀村禪宗
正月十六日 神尾寺
御庄屋
伊藤 清左衛門殿

(以下略)

建築物が焼失あるいは大破などによる解除の際の御裏書物の紛失、あるいは不取り置きを窺い知ることのできる事例は、再建時に御裏書物を紛失、あるいは取り置かなかったことを踏まえた上で、再建を寺社奉行へ願い出ている場合である。これらはいずれも第三者によって御裏書物の紛失や、不取り置きを指摘された書類はなく、いずれも寺社側自らの自己申告であることがわかる。

続いて御裏書物の紛失に関する処分について考察すると、①遠慮、②罰金、③建坪に対する一定割合の減少、以上の3つの処分がみられ、この3つの処分は建築物種によって、つまり「門以外の建築物」と「門」によって異なる。

まず門以外の建築物の御裏書物紛失、あるいは御裏書物を取り置かなかった場合の遠慮処分は5日、10日、15日とあり、違反と遠慮日数との間に相関は認められなかった。これに対して御裏書物を紛失、あるいは取り置かなかった場合、建築物の惣坪数如何によって減少される面積に相違がみられた。

〔史料8〕¹⁸⁾ 表-2の事例05

奥阿武郡宇生賀村禪宗本光院
右去ル寅ノ年寺焼失ニ付、此度再建之儀申出候然処、右焼失之節相届寺社奉行裏書物取置可申候處其氣付無之由不届之儀候、依之坪数五拾坪之内拾坪被減ニて四拾坪御了簡を以可被差免条差図を以可申出候事
右坪数之内式割引にて被差免候
奥阿武郡宇生賀村禪宗
本光院
右此間之遠慮被差免候事
右遠慮日数十日相立被差免候事

宝暦8(1758)年、奥阿武郡宇生賀村禪宗本光院の本堂（五間梁二六間、石居、茅葺、惣板敷、坪数三拾式坪、惣板天井）、釣屋（式間梁二三間、石居茅葺、惣板敷、坪数六坪、惣板天井）、庫裏（式間半二五間、石居、茅葺、惣板敷、坪数拾二坪、惣板天井）が焼失した。そこで寺側は宝暦12(1762)年になって再建願いを行ったところ、焼失の際に届け出を行わず御裏書物を取り置かないことが判明した。結果として本光院は遠慮10日、また本堂、釣屋、庫裏を合わせた惣坪数50坪のうちの2割引きの惣坪数40坪分の再建が寺社奉行から許可されている。この事例では明らかに御裏書物なる書類は建築物再建の際、非常に重要な書類であったこと、また御裏書物を紛失した際の処分が惣坪数の縮小という面積に対するものであったことは注目できよう。

このような御裏書物不所持による惣坪数減少処分は、「諸士御仕置帳」をみる限り、延享2(1685)年洪水によって破損し解除した

常昌寺本堂（三間半二五間惣坪数拾七坪半）が御裏書物を取り置かなかったために、宝暦8(1758)年再建願いを行った際、遠慮15日、坪数二割引の14坪にて再建を許可された例¹⁹⁾、などからも窺い知ることができる。

さらに次に示す表-2の事例25は御裏書物に関する事例のなかで、最もよく先例（以前の判例）の記載のみられる史料である。特に惣坪数の減少処分について興味深い記載が認められる。

〔史料9〕²⁰⁾ 表-2の事例25
(前略)

一裏書物取失分ハ、惣坪数之内ニ而式割方之量を以、減少被仰付御法候、此度蓮池院作事分前殿〔欠落〕除之節、裏書物不取置ニ付、先格〔欠落〕令成候、亦、安永九年三陽下村山伏正学院抱ノ阿弥陀堂九尺四面之分、裏書物取失候節、坪数〔欠落〕減少被差免候、②明和元年上関大野村般若寺抱十王堂裏書物取失候節、坪数七坪半之内、壹坪被減に而、六坪半〔欠落〕被差免候、③文化七年十一月山代市門村浄土宗建立寺抱之薬師堂、式間四面之分、④焼失節裏書物取失候節、御了簡を以、坪数無減少被差免、其上拾坪より内ハ少々御定免之者抱も有之ニ付、此度ハ以前有掛り坪数五坪五合御了簡を以、無減少差免、金百疋之過料被仰付、遠慮被差免候（後略）

まず「裏書物取失分ハ、惣坪数之内ニ而式割方之量を以、減少被仰付御法候」としつつも、安永9(1780)年三陽下村の正学院の阿弥陀堂が御裏書物を紛失しているにも関わらず、坪数の減少を差し免じられていること（下線部①）、また明和元(1764)年上関宰判大野村般若寺の十王堂についても、御裏書物を紛失したものの、1坪の減少で差し免じられている（下線部②）。さらに文化7(1810)年山代市門村浄土宗建立寺の薬師堂の御裏書物紛失の際には下線部③とあるように10坪より内の建築物については、建築物坪数減少処分が行われていなかった。つまり小規模な建築物については御裏書物紛失においても、建築物建坪数減少が行われない場合があったと考えられる。

また門については、多くの場合（表-1）にあるように、遠慮と罰金「金百疋」、あるいは遠慮と「金百疋」の過料の上、「彫物等無用ニ仕、輕相調候」と装飾の輕減を指導されているが、（表-2）の〔事例09〕に「一有掛り之坪数、式割減少ニ而遠見被差免候得ハ、門之儀ハ過料ニて被差免候、先格宝暦十三年御仕置帳有之」とあること、また事例を通じて門に対して惣坪数の減少処分は行われていないことから、惣坪数の減少はなかったと思われる。

ただ先にも述べたが、この御裏書物に関する規制違反は「諸士御仕置帳」を見る限り、諸臣屋敷つまり武家屋敷には確認されなかった。つまり御裏書物は、特に寺社建築物において重要な書類であったといえと共に、藩庁は寺社建築物と諸臣屋敷に対する規制を、普請申請手続きの段階において異なったものとして認識していたと考えられる。

2-2. 作事認可後の規制違反（許可されてからの手続き上の問題） 表-3

次に作事が許可された後の申請上の規制違反について考える。萩藩の作事は申請・許可を得たのち、12カ月以内に作事を成就する必要があった。この作事期限を萩藩では「作事物切」といったが、この「作事物切」を過ぎても作事が成就しない場合は規制違反となった（以下この種の違反を本稿では「作事物切延引違反」と呼ぶ）。もっともこの作事物切にはまったく猶予がなかった訳ではなく、作事期限内に成就が困難な場合には、作事延引の届け出（以下本稿では「作事延引届」と呼ぶ）を寺社奉行へ提出すれば、2~3カ月の作事成就期間の延長は認められていた。ただこの延引届けを提出しない場合は規制違反となり遠慮処分をうけている。

また作事物切延引違反あるいは作事延引届不届けは、2つ以上の建築物の作事許可を受けつつ、どちらか一方の作事が成就しない場合にも処分が行われている。例えば寺院側が本堂と庫裏を同時に再建しようと作事を申請し許可を得たものの、「檀家の儀銀子手違い等仕」などで、庫裏の再建が行えなかった場合などは遠慮処分をうけている²¹⁾。また作事を申請、許可を得た建築物の作事が、はじめからあるいは普請の途中に何らかの理由で作事継続が困難になった場合、作事の取り消しを申告する必要があるが（以下こうした書類を「願い捨り書類」と呼ぶ）、この提出を怠った場合についても遠慮処分をうけた。

ところで「諸仕御仕置帳」の事例をみる限り、作事願いには場合により2回の願い出が必要な場合があったようである。例えば、寛政2（1790）年前大津宰判通浦の正福寺では、本堂、庫裏が天明5（1785）年2月に焼失したため、同年10月に庫裏の再建願いを願い出たところ、差図をもって改めて申し出るよう寺社奉行所から沙汰があった²²⁾。正福寺としては早速差図をもって願い出るはずであったものの、材木不足ゆえ願い出を延引していたが、数年経ったのち寺側は再建願いを申し出た際、以前の願い出を取り消す申請を行っていなかったことが判明し、寺側は遠慮処分をうけている。つまり寺側は再建などの作事申請を行った際には、役所から指導ののち、再度作事願いの提出を求められていることがあり、この場合すみやかに再申請を行う必要があると共に、数年のちに願い出の場合は先願いの無効願いを提出したのち、改めて作事申請を行う必要があったことがわかる。

さて作事が成就した後は寺社奉行所による見分をうける必要があったことは先に述べたが、この場合施主方は作事成就の届け出を行う必要があった。

元文5（1742）年大嶺村善立寺が寺所替えに伴う本堂建立願いを元文2（1737）年2月に申し出し、同3月に願い通り差し免じられた。ところが「作事二物切之内成就之届」を元文5（1740）年になっても届け出していないことが明らかになったため、善立寺は遠慮を申し出ている²³⁾。

以上作事認可後の規制違反について述べてきたが、この作事認可後の規制違反に対する処分は、先に述べた作事許認可申請段階のもの（御裏書物の紛失・不提出）のように罰金や申請する建築物の惣建坪の減少処分はなく、遠慮処分が処分の中心であったようであり、御裏書物の紛失に比べ、処分は軽いものであったと。

3. 萩藩寺社建築物規制の特徴

萩藩寺社建築物に対する建築規制についてみてきたが、最後に萩藩の寺社建築物に対する規制の特徴のいくつかについて述べたい。

はじめに1章で挙げた史料により、以下の点が明らかになった。まず①萩藩の寺社建築に対する規制は、主に享保期に行われ18世紀中期には整備された。また②今回萩藩の寺社建築物の規制をみる限り、萩藩の寺社建築規制には、幕府による寛文八年令の三間梁規制のような構造を主眼とした規模規制は見られず、むしろ建物の惣建坪の減少処分はなく、遠慮処分が処分の中心であったようであり、御裏書物の紛失に比べ、処分は軽いものであったと。

り、いずれも普請申請書類記載と再建建物との間の面積相違が問題となっていることから窺い知ることができる。

次に注目できる点は、③現状の建物が大破・焼失した際、その建物の姿（規模や装飾など）を寺社奉行へ提出し、寺社奉行がこれを証明した書類、いわゆる「御裏書物」の存在である。つまりこの御裏書物記載と同じ姿の建物の再建を原則として落は容認していたことを物語っているといえるのではなかろうか。大破、焼失した建物とは異なる建物を再建したいとき、向拝については「臂木三ツ斗」、その他の臂木については丹臂木まで、増築は五坪までといった、寺社建築物に対して一律に適用される規制によって造形は制限されるものの、大破・焼失した建築物と同じ姿の再建が許されたということは、寺社建築物を特定の規制によって一律に一あるいはおしなべて一取り決めてしまうのではなく、個々の建築物の既存の状態で注目したものであったと考えられるのではなかろうか。

以上萩藩寺社建築物における建築規制について考察してきた。別稿ではこの「諸士御仕置帳」記載規制違反事例のうち、寺社建築物の違法建築（建設）行為を中心に萩藩の規制について検討する予定である。

謝辞

本論考を作成するにあたっては、山口県文書館に所蔵文書を閲覧させて頂きました。また大阪歴史学会近世史部会、および山口大学教養学部助教授の森下徹氏には史料発見のきっかけを与えて下さいました。また貝塚市教育委員会の皆我友良氏には史料解析に際して御教授を賜りました。ここに慎んで謝意を表します。

参考文献・引用および註

- 1) 拙稿『近世における建築規制に対する大坂町奉行所、大工、組織大工、施主の対応に関する研究』1999年3月 私家版。
- 2) 丸山俊明「『岩倉村文書』普請願書と家建見分」『日本建築学会計画系論文報告集』no.524 pp297～304 1999.10. 丸山俊明、日向通「京都同町奉行所による出来見分の実施形態について―出来見分の役人構成を中心として」『日本建築学会計画系論文報告集』no.524 pp243～249 2000.5.
- 3) 金行信輔「寺社建築の規制・認可に関する手引書」『論叢きんせい』21 1999年 第21号、「寺社建築に対する江戸幕府の規制法令について」『建築史学』33号 1999年、同「幕府寺社奉行所における建築認可システムの史的検討」高木俊輔、渡辺浩一編『日本近世史科学史研究』北海道大学図書刊行会 2000年所収、同「江戸の都市政策と建築に関する研究」1999年私家版。氏の規制研究は単に成文としての規制のものを取り上げるものではなく、規制、ひいては近世建築物を取り巻く社会的背景にまで射程を入れた精力的な論考であるといえよう。
- 4) 例えば小倉強『東北の民家』相模書房 1955年。あるいは長崎県教育委員会編『長崎県の民家（前編）』1972年。
- 5) 拙稿「萩藩における建築規制行政史料について（領国における建築規制行政実態把握のために）」『日本建築学会大会学術講演梗概集』1999年9月 pp57～58。同「萩藩の寺社建築物に対する建築規制について」『日本建築学会近畿支部研究報告集』2000年 pp865～868。同「萩藩における建築規制行政について―山口県文書館所蔵「毛利家文庫」「諸士御仕置帳」記載の建築規制違反事例を通して―」『日本建築学会大会学術講演梗概集』2000年9月。また「毛利家文庫」については山口県文書館編『山口県文書館史料目録～五』1963～1978年を参照。また今回用いた史料は、山口県文書館所蔵「毛利家文庫」のうち享保3（1718）年から文化13（1816）年までの寺社規制そのもの、あるいは寺社奉行から寺社建築規制の運営について当職、当役への伺いなどの記録「寺院作事御附全」（毛利家文庫文書番号 法令（40-32））、および萩藩の基本法典である「二十八冊御諸附」（「御書付其外後規要集」を用いた（山口県文書館編『山口県史料近世編法制（上）（下）』1977年））。
- 6) 山口県文書館所蔵「毛利家文庫」「諸士御仕置帳」文書番号 刑科（3～21）。なお「諸士御仕置帳」についての研究としては西島勘治「長州藩における御仕置の形態」『山口県地方史研究』第55号 1986年6月 pp13～22、同「御仕置帳にみる足軽・中層・陪臣の実像―長州藩の場合―」山口県地方史研究 第62号 1989年10月 pp32～45がある。
- 7) 以下本章の典拠は（表-1）を参照されたい。
- 8) 萩藩の行政について簡単に述べておくと、寺社奉行所など長州藩庁の書役所は、蔵元という一面にまとめられていた。また諸役所の支配にあたるのが当職、当役とよばれる役職であった。一方萩藩内地方支配は郡奉行のもと、18の裁判ごとに代官と大庄屋が置かれ、各裁判の支配にあたり、それぞれの村には庄屋が置かれていた（小川国治編『山口県の歴史』山川出版社 1998年）。
- 9) 以下史料の下線部は筆者によるものである。
- 10) 第2章第1節に御裏書物の一例を示している。
- 11) 妻木、青山「大坂町奉行所による建築規制行政と大工組織の建築規制運用について―河内国古橋組・摂津国福井組文書を中心に―」『日本建築学会計画系論文集』No.511. 1998.9 pp177～183。
- 12) ただし「諸士御仕置帳」をみる限り、実際の規制違反作事を行った事例は確認されず、寺院建築物のみであることは規制の整備を考える上で注意すべき事項である。
- 13) 「毛利家文庫」「諸士御仕置帳」文書番号（51-17）（65の52）。
- 14) この理由についてはさしあたり不明であるが、寺社と武家屋敷との間に普請申請手続き上の相違があった点は指摘できよう。
- 15) 差図は明らかに浄土真宗のプランであるが、余間仏壇が設けられていないなど、一般的なプランとは異なる部分がある。これについては萩藩における真宗寺院においてこうしたプランの有無についての議論が必要であるが、さしあたり不明である。
- 16) 「毛利家文庫」「諸士御仕置帳」文書番号（51-17）（65の30）。
- 17) 「毛利家文庫」「諸士御仕置帳」文書番号（51-17）（65の39）。
- 18) 「毛利家文庫」「諸士御仕置帳」文書番号（51-15）（87の67）。
- 19) 「毛利家文庫」「諸士御仕置帳」文書番号（51-15）（87の42）。
- 20) 「毛利家文庫」「諸士御仕置帳」文書番号（51-21）（60の50）。
- 21) 「毛利家文庫」「諸士御仕置帳」文書番号（51-31）（05の02）。
- 22) 「毛利家文庫」「諸士御仕置帳」文書番号（51-19）（62の05）。
- 23) 「毛利家文庫」「諸士御仕置帳」文書番号（51-10）（14の09）。

（2000年7月10日原稿受理、2000年11月1日採用決定）